

《研究報告》

先天性心疾患をもつ子どもと母親の母子関係 - Family Diagnostic Testを用いた検討 -

遠藤 晋作¹⁾, 堀田 法子²⁾

¹⁾ 椛山女学園大学看護学部, ²⁾ 名古屋市立大学看護学部

要 旨

【目的】 著者は、先天性心疾患をもつ子どもとその母親を対象とした先行研究（遠藤ら2015）の中で、親子関係に関する尺度：Family Diagnostic Testを調査した結果、母親は子どもに対するしつつけを厳しくないと思えること、子どもは母親を情緒的に受容して接触を増やし、両親の考えを一致したものと捉えることを示した。本研究では、Family Diagnostic Testの更なる詳細な分析を行うことで、先天性心疾患をもつ子どもとその母親の母子関係の特徴と属性による差異を明らかにし、母子関係に配慮した援助の示唆を得ることを目的とする。【方法】 先天性心疾患をもつ10～12歳の子どもとその母親に対して、属性や母子関係（Family Diagnostic Test）に関する無記名自記式の質問紙調査を行った。【結果】 92組（回収率99.0%、有効回答率92.9%）の子どもと母親から回答を得た。共に「母親が子どもを受容している程度」を示す、母親の基本的受容と子どもの被受容感に有意な中程度の正の相関が示された（ $p<0.01$ ）。また、出生順位や疾患の重症度が母子関係に関連していることが示された（ $p<0.05$ ）。【結論】 医療者は、母親が子どもに対する受容を維持できるように母子双方の目線から評価や援助を行うことが求められる。また、きょうだいとの兼ね合いや重症度に配慮することも必要である。

キーワード：先天性心疾患, 母子関係, 学童